



### 接遇マナー研修

## 互いを尊重した関係から チームビルディング向上へ

### 笑顔であいさつからはじめよう

チームビルディングとは、「仲間が思いを一つにして、一つのゴールに向かって進んでゆける組織づくり」のことです。わたしたちは毎日多くの場面で、さまざまな「人」と関わっています。「伝える」と「伝わる」の違いを含め、スムーズ・確実・効果的なコミュニケーションについて、グループワークを取り入れた研修をおこないました。

講師は毎年の新入職員への接遇研修でお世話になっている高橋美幸先生。気持ちのよい挨拶とは何か、職員間の挨拶がなぜ大切なのか、「自分の親しい人しか挨拶



しない」「挨拶されても返事をしない」「挨拶されても気付かない」の各場面の原因を考え、職員

者・利用者、ご家族の満足度向上

間の挨拶が行き交う職場を作るためのアイデアについてグループで話し合いました。  
参加した職員からは、「気持ちよく仕事をできる環境づくりのためには、互いの人権を尊重し思いやりを持って接することが大切だと感じた」「相手の立場に立つて考えることが大切だとあらためて学ぶことができた」などの感想が出されました。互いが尊重された良い関係を築くことが、働きやすさにつながり、自然に職場内が活性化すること、そしてその結果として患者・利用者、ご家族の満足度向上

### ストレスチェックの職場分析結果から見えること

## 職場改善にみんなできとりくむことが大切

ストレスチェック集団分析結果学習会

職業性ストレスチェック（調査）の目的は、●個人のセルフケアによるメンタル不調の未然防止、●職場診断のツールとして活用することで、職場で何がストレスと感じているのかを明らかにすることです。  
そして制度上の問題点としては、①診断した後の治療がほとんど産業医と企業任せになっていること、②集団分析結果を職場改善に活かされた事例がほとんどないこと、③2点があげられます。  
今回はこれらの問題点を共有

中村賢治統括産業医（大阪社会医学研究所所長）による2017年度ストレスチェック集団分析結果の学習会を3月23日に開催しました。職責者、各事業所労働安全衛生委員38人が参加しました。2016年度に制度が義務化され、今年で第2回目の学習会となります。

職場改善対策をすすめる上で、職場改善のヒントとなるように、中村賢治産業医より各職場評価票が職場長に配布されました。  
結果からは傾向的に、職場別の差が大きい・多様な考え方があり・数値が絶対的に信頼できるものではない、となっています。  
また、ストレス対策のポイントとして「上司」の責任にはせず、職場改善は職場長だけで決めるものではない、②職場のすべての人に関わっている問題として取り組む、③合わない人がいる

のほ大前提で対策を考える、④職場内のシステムやルールを変えることが望ましい、⑤一時予防（職場改善）を行なった上で二次予防（個人の対策）に取り組む。と、この5つが上げられます。このような内容を踏まえた上でグループで討議しました。グループでは「もっとこうしたら今より働きやすくなる」と職場で話し合い、チームケア機能を有効に働かせることが大切」など、職場によってさまざまな意見が出されました。  
ストレスチェック結果に基づいたデータや傾向を共有することに より、集団分析を活かして職場をどのように改善していくかを考えていきます。  
（産業保健師 玉置 裕子）

### 理事会報告

#### 2月度理事会（概要）

2月27日（火）午後6時から理事19名、監事3名の出席で2017年度・第6回理事会が社会医療法人同仁会本部3階会議室で開催されました。

理事長開会挨拶のあと、専務より会務報告、友の会活動、経営結果等が報告され、出席理事全員が確認しました。また前回に引き続き泉州看護専門学校建設募金の到達状況、全日本民医連総会参加報告、就業規則変更、耳原総合病院での総合入院体制加算算定の検討提案等が出され、出席理事全員の賛成多数

にて承認されました

#### 〈主な内容〉

- ① 拡大常任理事会等の会務報告
  - ② 健康友の会みみはら代表世話人会議報告
  - ③ 1月度経営結果についての報告
  - ④ 協議・確認事項
  - ・ 就業規則変更についての提案
  - ・ 泉州看護専門学校への建設募金について
  - ・ 全日本民医連総会参加報告
  - ・ 耳原総合病院「総合入院体制加算」の算定について
  - ・ 前回理事会班討論のまとめ
- 他

## 60年のあゆみ

耳原実費診療所創立60周年記念誌

いのち輝け未来へ

その4

### 第二章

## 地域の願いに応え、診療圏を広げ

1959年～1971年

（前号のつづき）

### 小児マヒから子どもを守る運動の中心となって

1960年に、小児マヒの伝染が全国的に広がり、幼児を持つ母親たちが、わが子への感染を気づかして子どもを小児マヒから守る運動が高まってきました。1960年12月、「子どもを小児マヒから守る堺市協議会」を結成し、耳原病院はその中心的な役割を果たしました。



公害の元凶、関西電力火力発電所の150mと180mの煙突

壊を生み出しました。堺市から高石市にかけて海が埋め立てられ造成された臨海工業地帯では、工場のはき出すガスや煙が府民を直撃しました。耳原病院では、1965年8月、院内に「公害対策委員会」を設置し、1968年11月、「堺から公害をなくす市民の会」（27団体）が結成され、公害問題にからんで訴えの強い「三宝地区」の健康被害調査を実施しました。この活動の中から「公害知事さん、さよなら」という声が府下一円に広がりました。1967年4月、堺市長選挙に今村雄一副院長が立候補しました（第1回目の立候補）。同月、東京都に革新知事（美濃部氏）が誕生しました。これらの運動は1971年の第1期黒田革新府政実現の原動力の一つにもなりました。

（つづく）

※発刊時の原文のまま掲載しています。